

チベット語訳『八千頌般若』の 改訳過程とその背景

——近代日本の入蔵者らによる将来本を手がかりとして——

庄 司 史 生

1. 問題の所在

河口慧海（1866–1945）、能海寛（1868–1901?）、寺本婉雅（1872–1940）、青木文教（1886–1956）、多田等観（1890–1967）といった近代日本の入蔵者らにより、仏典等の文献がチベットから日本へと将来された⁽¹⁾。彼らは共通してチベット語訳『八千頌般若』を将来していた。

筆者はこれまで、『八千頌般若』の形成過程について、主としてそのチベット語訳諸本を用い、インドにおける2種の『八千頌般若』とチベットにおける3種の『八千頌般若』について検討してきた（庄司〔2009〕、〔2014〕他）。その中で、カンギユル所収本ではなく、単独の写本として書写された同経典が数多く現存していること（その多くは紺紙金（銀）泥写本、いわゆる装飾経）、さらにそれらの中には現存するネパール系梵本『八千頌般若』よりも古いテキストが残されていることを指摘した（庄司〔2010〕他）。

要するに、書写年代がそれほど古くはない装飾経であっても、その内容としてはツェルパ系カンギユル所収本よりも古い伝承を保持するテンパンマ系と近似する写本が残されていることが確認された。それらは『八千頌般若』の形成過程を明らかにする上で資料的に意義あるものといえる。

本稿では、近代日本の入蔵者らによって日本へと将来されたチベット語訳『八千頌般若』をとり上げ、カンギユル所収本を含む現存『八千頌般若』諸本中におけるその位置付けを明示し、その上で経典翻訳史的観点よりチベットにおいて3種の『八千頌般若』が生み出されるに至った経緯について考察し、その背景にインドにおける『八千頌般若』の経文に対する改変が関係していることを指摘する。

2. チベット語訳『八千頌般若』諸本について

筆者はすでに、次の2点を基準として諸本の分類が可能であることを指摘した。

【分類Ⅰ】 インドにおける2種の『八千頌般若』

12世紀の時点で Jagaddhalanivāsin が、『八千頌般若』には旧・新の2種（『現観莊嚴論』からの影響の無 [=系統A]・有 [=系統B] を基準とする）のテキストが現存することを前提とし、両者を意識的に分類していた。またそれら2種はチベット語訳として実際に現存している（庄司 [2009]）。

【分類Ⅱ】 チベットにおける3種の『八千頌般若』

17世紀の時点でダライ・ラマ五世が、訳語を基準としてチベット語訳『八千頌般若』を *sde can*、*'phreng ba can*、*bzo sbyangs* の3種に分類する伝承について言及している。それら3種もまた現存している（庄司 [2014]、[2015b]）。

詳説はここでは割愛するが⁽²⁾、以上の基準に基づいてチベット語訳『八千頌般若』諸本の特徴についてまとめると次の通りとなる。

まず、カンギユルの系統とあわせてみると、主としてテンパンマ系カンギユル所収本（L T）が【分類Ⅰ】では系統A（旧系統）、【分類Ⅱ】では *bzo sbyangs*⁽³⁾ となる。

一方、ツェルパ系カンギユル所収本（C P）は【分類Ⅰ】では系統B（新系統）、また【分類Ⅱ】では *'phreng ba can* となる。

そして混合系カンギユル所収本（D H N）は、【分類Ⅰ】と【分類Ⅱ】について、ツェルパ系と同系統である。

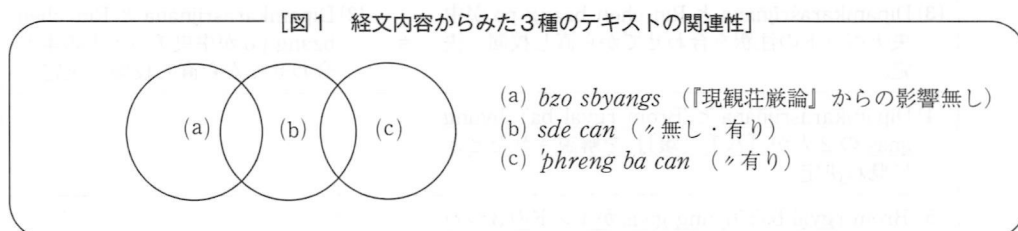
独立系のブダク写本は、3本（Fa Fb Fc）が収められているうちの最初の2本（Fa Fb）がツェルパ系カンギユルに順ずるものであり、残りの一つ（Fc）のみが特殊である。Fc写本は、【分類Ⅰ】ではテンパンマ系と同様に系統Aに属するが、【分類Ⅱ】では *sde can* に属する。本稿註2の表3に示されている通り、*sde can* に属するものは、カンギユル所収本中には、Fc写本の他に例がなく、あとは単独本の中にしか現存していない。

要するに、*sde can* は東洋文庫所蔵・河口慧海将来写本などのように、いわゆるテンパンマ・ツェルパ系「カンギユル」には収められず、単独で流布した写本としてのみ現存している。以上のように、チベットにおける3種の『八千頌般若』について、次の通り指摘することができる。

- 1) *bzo sbyangs* は、『現観莊嚴論』からの影響により経文に付加がなされる前のテキストであり、またこれは3種の中で『翻訳名義大集』の訳語と比較的一致する。
- 2) *'phreng ba can* は、『現観莊嚴論』からの影響により経文に付加がなされた後のテキストであり、ネパール系の梵本とほぼ一致する。
- 3) *sde can* には、『現観莊嚴論』からの影響を受ける前のテキスト（系統A）と、影響を受

けた後のテキスト（系統B）とが並存している。また、*sde can* の経文について検証したところ、*bzo sbyangs* と *'phreng ba can* の中間形態を示すものであった（庄司 [2015a]、[2016a]）。

諸本の経文内容を比較検討した結果によると、これら3種は [図1] のような関係にある。



ここで3種の成立順序について考察する必要があるが生じる。つまり、経文の内容として(a)と(c)の中間に位置付けられる(b)は、上記図の通り、成立時期としても(a)と(c)の間のテキストであるのか（パターン①：(a)→(b)→(c)）、あるいは(a)と(c)とを校合した結果生み出されたテキストであるのか（パターン②：(a)→(c)→(b)）、ということである。

以下に、3種のテキストの成立順序について、チベット語訳『八千頌般若』の改訳過程とともに考察する。

3. チベット語訳『八千頌般若』の改訳とその背景

前項で確認した通り、チベット語訳『八千頌般若』には大別して3種のテキストが現存していることになる。ここではその理由について、『八千頌般若』の翻訳と改訳の記録に基づいて考察する。特に、『八千頌般若』とあわせて『現観莊嚴論』の注釈を行った Haribhadra（9世紀頃）の『現観莊嚴光明』のチベット語訳のコロフォンと、チベット語訳『八千頌般若』のコロフォンに着目する。両コロフォンの記述を対比させると、両者をあわせて翻訳・改訳していたことがわかる。チベット語訳『八千頌般若』のコロフォンの記述は諸本間において出入りがあるが（庄司 [2016a] を参照）、第8回の改訳までの記録を記す①ナルタン版カンギェル所収『八千頌般若』のコロフォン（デルゲ版と北京版では第7回の改訳の記録まで）と、②チベット語訳『現観莊嚴光明』のコロフォン（デルゲ版と北京版）の和訳を抜粋して表にまとめると次の通りである。

[表1 チベット語訳『八千頌般若』と『現観莊嚴光明』のコロフォンの対比]

	①『八千頌般若』 ⁽⁴⁾	②『現観莊嚴光明』 ⁽⁵⁾
9c.	(1) Śākyasena と Jñānasiddhi と Dharmatāśīla 等が 翻訳・校閲・決定。	
10～ 11c.	(2) Subhāṣita と Rin chen bzang po が注釈と合 わせて翻訳。	(1) Subhāṣita と Rin chen bzang po が翻訳。
	(3) Dīpaṃkaraśrījñāna と Rin chen bzang po が中 央チベットの注釈を合わせてから直し校閲・決 定。	(2) Dīpaṃkaraśrījñāna と Rin chen bzang po が中央チベットの本と 合わせてから直し校閲・決定。
	(4) <u>Dīpaṃkaraśrījñāna と 'Brom rgyal ba'i 'byung gnas の2人が『八千〔頌〕』を解説されたとき に概ね決定。</u>	
	(5) <u>'Brom rgyal ba'i 'byung gnas がインドの3つの 経と合わせてから再び決定。</u>	
	(6) <u>'Brom rgyal ba'i 'byung gnas が解説、細かな部 分も決定。</u>	
12c.	(7) Blo ldan shes rab が多くのカシミールの本と中 央チベットの本を集めて決定。	(3) Dhi(i)rapāla と Blo ldan shes rab がよく翻訳して直した。
15c.	(8) <u>Chos skyong bzang po がインドとチベットの 本を原本と合わせ、校合した本をさらに校閲・ 決定。</u>	

以上のように、チベット語訳『八千頌般若』の(1)初訳(前伝期)の後、(2)と(3)の改訳時(後伝期)に注釈('grel pa)と合わせて翻訳したとする「注釈」とは、Haribhadra 著『現観莊嚴光明』を指すものと考えられる。一方、その『現観莊嚴光明』の(2)の改訳時に、本(dpe)と合わせたとあるが、それは『八千頌般若』を指すものであろう。さらに『八千頌般若』改訳(7)の際の、Blo ldan shes rab に関する記述が、『現観莊嚴光明』の(3)の記述と対応するものと考えられる(『現観莊嚴光明』は前伝期の目録『パンタンマ』と『デンカルマ』には記載がなく、後伝期に初訳されたことになる)。このことから、後伝期におけるチベット語訳『八千頌般若』の改訳は、『現観莊嚴光明』との訳語統一を意図してなされたものと推定できよう。⁽⁶⁾

なお、上記表中①『八千頌般若』のコロフォンはナルタン版のそれであるが、ロンドン写本カンギユル所収『八千頌般若』のコロフォンでは、以上の(1)から(8)までの中、下線部の(4)から(6)までの 'Brom rgyal ba'i 'byung gnas と、(8)以降の記述を欠いている。

以上に関連して、gZhon nu dpal (1392–1481) による『青冊』(Deb ther sngon po; The Blue Annals) に次のような記述がある。〔 〕は引用者による。

……そこで、〔Rin chen bzang po は〕「このお方〔Dīpaṃkaraśrījñāna〕は大学僧中でも大

学僧である」とお考えになって、『八千（頌般若）』、Nyi khri snang ba、『八千頌大註』など、多数の先に翻訳したものに対する再治をお願いした。すると Jo bo [Dīpaṃkaraśrījñāna] は、「私は衛 [dBus] にゆく。そのためには、私に随従して通訳をつとめにゆくことを必要とする」と答えられた。しかし大翻訳官はそのとき85歳であったので、帽子を脱ぎ捨てて、「私の頭はこうになってしまったから、随侍することができない」と申し上げた。……（羽田野 [1986: 78] より。また Chandra [1974: 4a]、Roerich [1949: 249-250]、望月 [2015: 6] を参照）

以上は、Dīpaṃkaraśrījñāna (982–1054) がチベットへ招かれ、ガリ (mNga ris) のトリン (mTho lding) 寺に到着した際の、Rin chen bzang po (958–1055) との会話の一部として残される記録である。ここに、Rin chen bzang po は、自身が既に翻訳していた『八千頌般若』の改訳を、Dīpaṃkaraśrījñāna に願ひ出ていることが記されている。Dīpaṃkaraśrījñāna がこの願ひを受けたか否か、ここには記されていないが、先のチベット語訳『八千頌般若』のコロフォンにおける改訳(3)の記述によれば、この願ひは受け入れられたのであろう。

つまり、Dīpaṃkaraśrījñāna が1042年にガリ (mNga ris) で Rin chen bzang po と会い、中央チベット (dBus) へ行く1044年までの2年の間に『八千頌般若』の(3)の改訳を行い、同じく1044年から Dīpaṃkaraśrījñāna が亡くなる1054年までの10年の間に 'Brom rgyal ba'i 'byung gnas とともに改訳(4)を行った（その翌年に Rin chen bzang po が亡くなっている）。そして Dīpaṃkaraśrījñāna の没後は、その法系を継いだ 'Brom rgyal ba'i 'byung gnas が1人で改訳の(5)と(6)を行った、ということになるだろうか。

このように何度も改訳が重ねられた背景には、前伝期に初訳されていた『八千頌般若』（おそらく系統A）と後伝期に初訳された『現観莊嚴光明』（系統Bに基づく注釈）との間において経文に不一致が認められたことが関係していると考えられよう。'Brom rgyal ba'i 'byung gnas が改訳(5)の際に「インドの3つの経」（rgya gar gyi mdo gsum）を用いているというが、その中に、系統Bの梵本『八千頌般若』が含まれていたのかもしれない。あるいは 'Brom rgyal ba'i 'byung gnas の時点では系統Bの梵本を入手することができず、Blo ldan shes rab (1059–1109) の改訳(7)の際に用いられたカシミールの本が系統Bであったのであろうか。

以上について、資料を精査して今後も検討する必要があるが、ここまでの経過について、先述した2つのパターンについて次の通り推定する（以下の“→”は筆者による推定）。

前伝期

(1) 梵語『八千頌般若』がチベットに伝わり、Śākyasena と Jñānasiddhi と Dharmatāśīla 等が翻訳。

→この時翻訳されたテキストは、先の【分類Ⅰ】では系統A (『現観莊嚴論』以前)、また【分類Ⅱ】では『翻訳名義大集』の訳語と比較的一致する *bzo sbyangs* であったと推定。
『パンタンマ』等に収録される『八千頌般若』がこれにあたるか。

後伝期

(2) Haribhadra の『現観莊嚴光明』がチベットに伝わり、Subhāṣita と Rin chen bzang po が翻訳。この時、すでに翻訳されていた『八千頌般若』もあわせて改訳。

→両者間において経文が完全には一致しなかったものと推定。

(3) Rin chen bzang po が Dipaṃkaraśrījñāna に翻訳の再治を依頼し、2人で改訳。

(4)その後、Dipaṃkaraśrījñāna と 'Brom rgyal ba'i 'byung gnas が2人で改訳。

(5)Dipaṃkaraśrījñāna の没後、'Brom rgyal ba'i 'byung gnas が、3つのインドの経を用いて1人で改訳。

(6)さらにもう1回、'Brom rgyal ba'i 'byung gnas が1人で改訳。

パターン① ((a)→(b)→(c))

→ここで【分類Ⅰ】系統Bの梵語『八千頌般若』がチベットにもたらされ、'Brom rgyal ba'i 'byung gnas が関わる計3回の改訳の際に【分類Ⅱ】 *sde can* が誕生か。

パターン② ((a)→(c)→(b))

→ここで【分類Ⅰ】系統Bの梵語『八千頌般若』がチベットにもたらされ、それに基づいて 'Brom rgyal ba'i 'byung gnas が改訳し、そのテキストが【分類Ⅱ】 *'phreng ba can* であったか。

(7) Blo ldan shes rab が多くのカシミールの本と中央チベットの本を集めて改訳。

パターン① ((a)→(b)→(c))

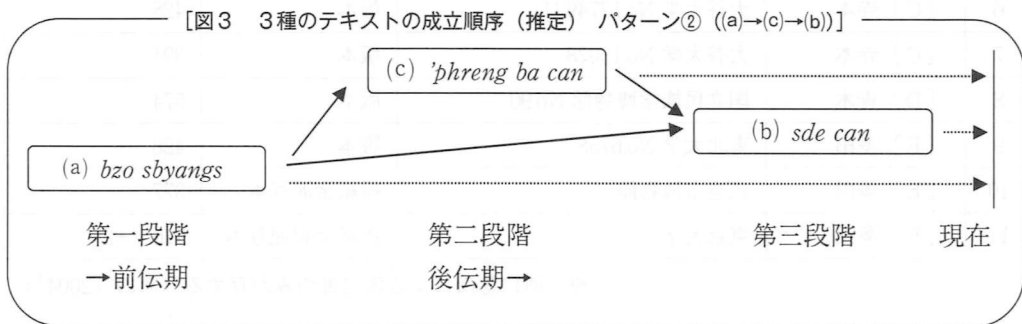
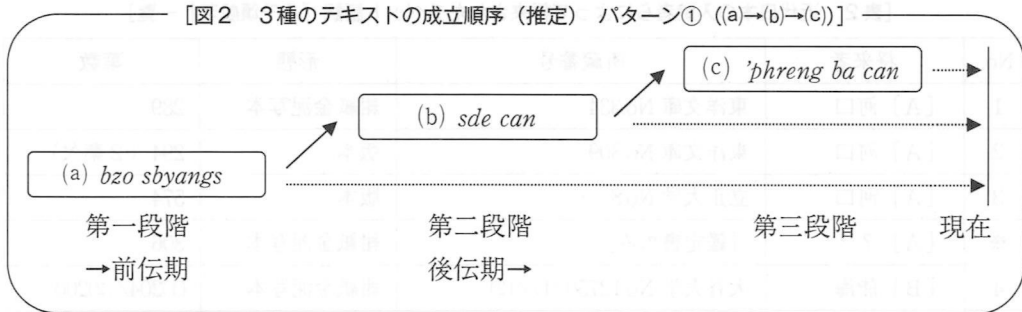
→ Blo ldan shes rab のここでの改訳により *'phreng ba can* が誕生か。

パターン② ((a)→(c)→(b))

→ Blo ldan shes rab はここで *'phreng ba can* を再治か。

→その後、*bzo sbyangs* と *'phreng ba can* のいずれかを原本とした上でもう一方のテキストを校合させた (*bzo sbyangs* を原本とするならば、それに *'phreng ba can* を校合) 結果、両者の中間形態のテキスト *sde can* が誕生か。

このように、3種のテキストの成立順序を2つのパターンによって想定した上で、それを図示すると次の通りとなる⁽⁷⁾と考えられる。



4. 入蔵者が将来したチベット語訳『八千頌般若』とその特徴

さて、本稿冒頭に述べた通り、近代日本の入蔵者らは共通してチベット語訳『八千頌般若』を将来していた。ここでは、諸氏の将来した諸本の概要と特徴を提示し、それらが同経典の改訳過程とその背景を明らかにする手がかりとして有用なものであることを指摘することとした。

まず、既に公表されている目録等をたよりに、諸氏が将来したチベット語訳『八千頌般若』の所蔵機関を一覧で示すと以下の通りである。⁽⁸⁾

A 河口慧海将来本

1. 東洋文庫所蔵写本
2. 東洋文庫所蔵版本
3. 立正大学所蔵版本
- ※ 写本の鑑定書

B 能海寛将来本

1. 大谷大学所蔵写本

C 寺本婉雅将来(?)本

1. 大谷大学所蔵版本①
2. 大谷大学所蔵版本②
3. 大谷大学所蔵版本③

D 青木文教将来本

1. 国立民族学博物館所蔵版本

E 多田等観将来本

1. 東北大学所蔵版本
2. 花巻市博物館所蔵写本
3. 東京大学インド哲学仏教学研究室所蔵写本

次に、諸氏によって将来されたチベット語訳『八千頌般若』を一覧にして記すと以下の通りである。

【表2 近代日本の入蔵者らによって将来されたチベット語訳『八千頌般若』一覧】

No.	将来者	所蔵番号	形態	葉数
1	[A] 河口	東洋文庫 No.334	紺紙金泥写本	289
2	[A] 河口	東洋文庫 No.309	版本	294 (2葉欠)
3	[A] 河口	立正大学 No.8	版本	574
※	[A] ??	[鑑定書のみ]	紺紙金泥写本	306
4	[B] 能海	大谷大学 No.12750 (1)/(2)	紺紙金泥写本	(1)204/(2)200
5	[C] 寺本	大谷大学 No.12748 (1)/(2)	版本	(1)235/(2)190
6	[C] 寺本	大谷大学 No.12749 (1)	版本	428
7	[C] 寺本	大谷大学 No.13078	版本	391
8	[D] 青木	国立民族学博物館 No.90	版本	574
9	[E] 多田	東北大学 No.6758	版本	428
10	[E] 多田	花巻市博物館	紺紙金泥写本	377
11	[E] 多田	東京大学	紺紙金泥写本	310 (+2)

※ 河口慧海による鑑定書のみが存する(河口 [2004])。

以上のように、諸氏によって将来されたチベット語訳『八千頌般若』は管見の限りでは全11点となる。これらについて、先行研究が存在するものはそれに従い、以下に概観する。⁽⁹⁾

4.1 [A] 河口慧海将来本 (全3点)

河口慧海将来本は、3点が残されている。また、それらの他に河口慧海は『八千頌般若』写本の鑑定書を記しており、あわせてここに紹介する。

4.1.1 [A] 河口慧海将来・東洋文庫所蔵写本

本写本については、東洋文庫 [2002] に収録されている。その詳細は、拙稿にて提示した(庄司 [2010:3-4])。抜粋して示す。

- ・東洋文庫蔵外 No.334, Ka 1a1-289b7.
- ・葉数：全289葉 (完本) ・法量 (料紙)：25.5×70.0 cm
- ・行数：8行体 ・書体：ウチェン
- ・冒頭に次の書き込み (ウメ書体) がある。

「日本の求法者宝比丘（に）シガツェのデレク・ラプテンの母スナム・ベルドウンとドルジェ・ユルギェルチェンから金の『八千頌般若』とそれに附属する経木紐一組を捧げた」（東洋文庫 [2002: 19] より引用）。

- ・一組の装飾された経帙板と紐あり。
- ・末尾に訳者等を示すコロフォンはなく、9音節×4の偈で終わる（289a8）。

本写本の入手時期が、河口慧海の第2回入蔵時であることを拙稿で指摘した（庄司 [2011b]）。彼の第二回入蔵帰国後に開かれた将来品展示会の図録中に、本写本の経帙板を見出すことができる（河口 [2001]）。本写本は【分類Ⅰ】系統A、【分類Ⅱ】*sde can*である。

4.1.2 [A] 河口慧海将来・東洋文庫所蔵版本

本版本は、東洋文庫 [2002] に蔵外 No. 309（版本）として収録されているが、その詳細については記されていない。筆者が確認したところ、最終葉2葉が欠けている⁽¹⁰⁾。本版本は【分類Ⅰ】系統B、【分類Ⅱ】*'phreng ba can*である。

4.1.3 [A] 河口慧海将来・立正大学所蔵版本

本版本については、拙稿にて提示した（庄司 [2011a: 2]）。抜粋して示す。

- ・法量（料紙）：30.8×8.8 cm (12 1/8×3 1/2 inch)
- ・法量（版木の枠）：19.4×4.5 cm (10 1/8×2 1/8 inch)
- ・行数：6行体
- ・葉数：全574葉（完本。第1葉×3と第574葉×2の重複あり）
- ・マージンによるとA巻
- ・経帙板（32.5×9.5cm）と付属の紐あり
- ・表題紙右に「佛教宣揚會蔵書之印」押印あり

筆者の調査により、本版本はカンギユルの系統では、デルゲ版とその復刻であるウルガ版の間に位置づけられるものであること、また彼の第一回入蔵時に入手されたものであることが明らかとなった（庄司 [2010]）。

なお、本版本は後述する青木将来本（筆者未見）と法量、葉数、巻名が同じである。両者が同本である可能性も考えられる。本版本は【分類Ⅰ】系統B、【分類Ⅱ】*'phreng ba can*である。

※ その他『八千頌』写本の鑑定書

現所在は不明であるが、河口慧海によるチベット語訳『八千頌般若』の鑑定書が残されている（河口慧海 [2004] 所収）。306葉からなる紺紙金泥写本である。

4.2 [B] 能海寛将来本 (全1点)

能海寛将来本には、以下の1点を確認することができる。

4.2.1 [B] 能海寛将来・大谷大学所蔵写本 (筆者未見)

本写本は『大谷目録』に収められている（大谷大學圖書館 [1973 : 441]）。

No.12750 (1), Tome 668 Ka 1-204 (missing ; ff. 205).

No.12750 (2), Tome 668 Kha 1-200 (missing ; ff. 118, 147).

Size of paper ; 19 × 58 cm. 7 lines on each page. Bruoght by Kan Noumi.

また、本写本と同葉数の『八千頌般若』が、以下の能海寛自身による手書きメモに記されている（能海寛 [2009 : 103]）。

第七号

◦ ārya aṣṭa sāhasrikāprajñāpāramiā

'phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa

八千般若 中大本 十月卅日求、金銀写字經。

上卷 式百四葉、已下欠、

下卷 式百葉、□□□完、

さらに、本写本については、南條文雄が能海寛の妻静子へ宛てた「能海寛君所蔵西藏經典目錄写」の中にも見出すことができる（南條 [1905] より）⁽¹¹⁾。

第七號一、八千般若 上卷 大本 二百四葉 以下欠 同（金銀泥写字）

下卷 同 二百葉 同

以上の記述によると、本写本が明治32（1899）年10月30日に入手されたものであることがわかる。⁽¹²⁾

なお、本写本は筆者未見である。先行研究として、山口（川合）務氏が調査を行っており、

他の『八千頌般若』諸本に比べ、コロフォンの記述が異なる写本であることが指摘されている⁽¹³⁾。また、上記引用のとおり、『大谷目録』によると、第2巻118葉、147葉が現存していないという。本写本は【分類Ⅰ】系統A、【分類Ⅱ】は未確認である。

4.3 [C] 寺本婉雅将来(?)本 (全3点)

寺本婉雅将来の可能性があるものに、大谷大学所蔵の3点を数えることができる。『大谷目録』の「序」には次のように説明されている (大谷大学図書館 [1973 : i])。

(略) この北京版大蔵経は、本学教授故寺本婉雅氏が将来されたものである。それと同時に、大蔵経に収められていない多数のチベット文献、いわゆる蔵外文献をも将来せられた。また、この蔵外資料のなかには、入蔵を志して果さず客死された故能海寛氏が寺本氏に託されて将来したものも含まれているのである。そのほか、爾来、外地に遊学した人たちが持ち帰った資料を累積して、本学図書館に納められていたのである。

(引用中の波線部は引用者による)

上記引用中の波線部「故能海寛氏が寺本氏に託されて将来したもの」の中にはチベット語訳『八千頌般若』があるが、それが、本稿前述の能海寛将来本である。

大谷大学図書館には計4点のチベット語訳『八千頌般若』が収められていることを当該目録により確認することができるが、ここではその中の能海寛将来本以外の3点を、仮に寺本将来本とする⁽¹⁴⁾。

4.3.1 [C] 寺本婉雅将来(?)・大谷大学所蔵版本①

まず、『大谷目録』には次の版本を確認することができる (大谷大学図書館 [1973 : 440])。

No.12748 (1), Tome 666, Ka 1-235

No.12748 (2), Tome 666, Kha 1-190.

Size of paper ; 16.5 × 53 cm. 7 lines on each page.

Tr. Śākyasena, Jñānasiddhi, Dharmatāśila etc.

Rev. Subhāṣita, Rin chen bzang po, with commentary.

Rev. Dīpaṃkaraśrījñāna, Rin chen bzang po.

Rev. Dīpaṃkaraśrījñāna, Rgyal ba'i 'byung gnas.

Rev. Rgyal ba'i 'byung gnas.

Rev. Blo ldan shes rab.

本版本は【分類Ⅰ】系統B、【分類Ⅱ】未確認である。

4.3.2 [C] 寺本婉雅将来(?)・大谷大学所蔵版本②

また、同目録に次の版本が収められている (大谷大學圖書館 [1973: 440])。

No.12749 (1), Tome 667, Ka 1-428.

Size of paper ; 10 × 57 cm. 6 lines on each page.

なお、本版本と同葉数のチベット語訳『八千頌般若』が多田等観将来本の中にも見いだされる (後述の『東北目録』: Kanakura [1953] No.6578)。本版本もまた、【分類Ⅰ】では系統Bに属するものである。

4.3.3 [C] 寺本婉雅将来(?)・大谷大学所蔵版本③

さらに、以下の版本が収められている (大谷大學圖書館 [1973: 504])。

No.13078, Tome 790, Ka 祿1-391. 10.5 × 33 cm. 6 Ls.

以上3点が『大谷目録』に収められている。筆者はこれら3点を2008年に調査したが、【分類Ⅰ】ではいずれも新しいチベット語訳『八千頌般若』(系統B)の内容であることを確認している。本版本もまた、【分類Ⅰ】系統B、【分類Ⅱ】未確認である。

4.4 [D] 青木文教将来本 (全1点)

青木文教将来本は、以下の一点を確認することができる (長野泰彦 [1983: 62])。

4.4.1 [D] 青木文教将来・国立民族学博物館所蔵版本 (筆者未見)

90 [標本名] 文献 [標本番号] H64694

[現地名] dPe cha ペチャ

[寸法] 28.5 × 8.7

1) 'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa.

2) 聖八千頌般若波羅蜜多 [經]。

3) brGyad stong (Vol. A).

4) fols. 1-574a5 (doubling: fols. 7, 53, 253; missing: fols. 573).

- 5) Tr. Shākya se na, Dznyā na si ddi, Dharma tā shi la.
 Rev. Su bhā shi ta, Rin chen bzang po.
 Rev. Dī paṃ ka ra shrī dznyā na, Rin chen bzan po.
 Rev. Dī paṃ ka ra shrī dznyā na, 'Brom rGyal ba'i 'byung gnas (場所 sMad gNye thang Namō che).
 Rev. 'Brom rGyal ba'i 'byung gnas (場所 Ra sgrenḡ gtsug lag khang).
 Rev. Blo ldan shes rab.
- 6) spar byang smon tshig (A. mDo khams pa Byams pa).
- 7) 北京版 No.734.

先述したとおり、本版本と目録上同一の版本が、前述の立正大学図書館所蔵・河口慧海将来本である。河口将来本はラサで購入したものであることが明らかとなっている（庄司 [2010]）が、青木将来の本版本も同じ場所で購入したのであろうか。もしも河口将来版本と同版であるならば、【分類Ⅰ】系統B、【分類Ⅱ】*'phreng ba can*となる。本版本の入手時期は、1913年1月22日のラサ到着から、1916年1月26日のラサ出発までの間であらうか。⁽¹⁵⁾

なお、青木文教将来資料は①東京大学、②国立民族学博物館、③龍谷大学大宮図書館、④正福寺に所蔵されているという。⁽¹⁶⁾

また、青木文教は1923年に「般若八千頌所説の大乗と小乗」を『大乘』2(6), pp.32-44に寄せている。

4.5 [E] 多田等観将来本（全3点）

多田等観将来本として、東北大学所蔵本（版本）、花巻市博物館所蔵本（写本）、東京大学所蔵本（写本）の三点を確認することができる。

4.5.1 [E] 多田等観将来・東北大学所蔵版本（筆者未見）

まず東北大学には次の版本が収められている（Kanakura [1953 : 463]）。

No.6758, Tome 159, Ka 1-428

A text of Aṣṭasāśrikā-prajñāpāramitā (No.12), generally called Tshe mchog gling edition, together with the instruction of its reciting method, writtern by Ye shes rgyal mtshan.

この版本と同葉数であるのが、前述の寺本将来本（『大谷目録』No.12749(1)）である。多田将来本は筆者未見であるが、両者が同一である可能性も考えられる。先の寺本本と同版であるな

らば、【分類Ⅰ】系統Bとなる。

4.5.2 【E】多田等観将来・花巻市博物館所蔵写本

次に、花巻市博物館所蔵本は、龍谷ミュージアムの展示図録において、写真入りで次のように紹介されている（龍谷ミュージアム [2014 : 116]⁽¹⁷⁾）。

87 | 八千頌般若波羅蜜多經
チベット 14-15世紀
紺紙金字 各紙30.0×70.0 花巻市博物館

なお、本写本について、筆者は2015年3月に調査を行った。本写本の基本的な書誌情報は以下の通りである（筆者の調査に基づく）。

- ・材質：紙（罫線なし）。紺紙金泥写本。
- ・法量（料紙）：24.8×68.5 cm（第4葉をサンプルとした）。
- ・巻数：全24巻。・葉数：377葉（377a8で完結）。
- ・行数：8行体（1bは6行、2aから4aまで7行、4bから8行となる）。
- ・字体：ウチェン体。・巻表記：ka巻。・経帙板：なし。

先述した通り、本写本は【分類Ⅰ】系統Bに属し、また【分類Ⅱ】*sde can*⁽¹⁸⁾の伝承を受けるものである。このように分類されるテキストは他に例がなく、この点で同写本はきわめてユニークなものといえる。

4.5.3 【E】多田等観将来東京大学インド哲学仏教学研究室所蔵写本

本写本について、未だ詳しい書誌情報は公表されていない。所在確認は、以下の記述による（東京大学文学部印度哲学印度文学研究室 [1965 : (1)]）。

この目録は、昭和33、34年度、東京大学文学部において辻直四郎博士を代表者としておこなわれた文部省科学研究費交付金期間研究により購入した故青木文教師、多田等観師収集のチベット文献、および多田等観師寄贈のチベット文献のうち、いずれも多田等観師収集のラサ版カンギュル、ナルタン版テンギュル、デルゲ版テンギュル、紺紙金銀泥・聖般若波羅蜜多八千を除く各種チベット文献の目録である。所収文献のうち、故青木文教師収集のものは整理番号3、264、286、288、294、302、322、323、324計13点で、それ以外はす

べて多田等観師が収集されたものである。（引用中の波線部は引用者による）

以上の間接的な記述により、本写本の存在を確認することができる。

ところで、「等観年譜」に次の記述がある（多田明子&山口瑞鳳 [2005 : 39]）。

昭和二年（一九二七）

一月三十日、長女女子誕生。

（略）八月、紺紙金銀泥大般若経（八千頌）到来。（略）

ここに「紺紙金銀泥大般若経（八千頌）」とあるが、多田等観が将来したチベット語訳『八千頌般若』写本には、先に示したとおり、把握しているだけで写本が2点ある。そのうち、上記引用に言及される「紺紙金銀泥」写本は東京大学所蔵本だけであるから（花巻市博物館所蔵写本は、紺紙金泥写本である）、ここに記される1927年に日本へと到着したチベット語訳『八千頌般若』写本とは、現東京大学所蔵本を指すものと考えられる。

また、本写本について1980年の時点で山口（川合）務氏⁽¹⁹⁾がその調査結果を公表している（川合 [1980]）。筆者は2015年3月に同写本を閲覧調査したが、既に山口氏によって指摘されているように、本写本はいわゆる「東京写本（略号T）」と近似していることを確認した⁽¹⁹⁾。

本写本の基本的な書誌情報を記すと以下の通りである（筆者の調査に基づく）。

- ・材質：紺紙金銀泥写本。　　・法量：25.4×68.0 cm（第68葉をサンプルとした）。
- ・巻数：全24巻。　　・葉数：312葉。　　・行数：8行体。
- ・字体：ウチェン体。　　・巻表記：ka 巻。
- ・経帙板：あり（板上71.0×26.7×29.9 cm、板下70.3×26.9×29.9 cm）。
- ・八千頌は310a8まで。311a-312a8葉はチベット語訳 *Maitri-praṇidhāna* となる。

本写本は【分類Ⅰ】系統A、【分類Ⅱ】*bzo sbyangs*であることを確認した。カンギユルの諸系統の中ではテンパンマ系統のものと近似する。諸本の中で古い伝承を保持するものと考えられる。

5. 諸本中における多田等観将来写本の特徴

先に示した【分類Ⅰ】と【分類Ⅱ】に従った、チベット語訳『八千頌般若』諸本（特に筆者が実際に確認をしたカンギユル所収本を中心とした主な諸本）の全体像については他稿にて図示した⁽²⁰⁾。

既に指摘したように、諸氏が将来したチベット語訳『八千頌般若』を【分類Ⅰ】【分類Ⅱ】の2種の基準によって分類すると、実にさまざまなヴァージョンが残されていることがわかる。大乘經典としての『八千頌般若』の形成過程を明らかにするために、またカンギユルの系統研究の補足資料としてもこれらは活用されるべきであろう。チベット語訳『八千頌般若』諸本の中、【分類Ⅱ】について考慮するならば、テンパンマ系カンギユル所収本は(1) *bzo sbyangs* に、ツェルバ系カンギユル所収本は(3) *'phreng ba can* にそれぞれ相応するが、(3) *sde can* は両カンギユルの系統には収められていないことになる。既に指摘したように、東洋文庫所蔵の河口慧海将来写本は、【分類Ⅰ】では系統Aに属し、【分類Ⅱ】では *sde can* に属している(庄司[2010])。完全には一致しないが独立系統のカンギユルとされるプダク写本カンギユル所収のFc写本は、この河口将来のK写本と近似している。

この点において、多田等観が将来した花巻市博物館所蔵写本(Ht)は、【分類Ⅰ】では系統Bに属しながら、【分類Ⅱ】では *sde can* に属している。この分類パターンのものは他には見いだされず、この点において同写本は資料的に重要といえよう。

この他、多田等観将来の東京大学所蔵写本(Tt)は、チベット語訳『八千頌般若』諸本の中、最古の形態を伝えるテンパンマ系カンギユル所収本に近似したテキストであるという点において重要である。⁽²¹⁾

6. 結語

本稿では、チベットにおける『八千頌般若』の改訳過程とその背景について、特に近代日本の入蔵者らによる将来本を手掛かりとして考察した。本稿で得られた結果をまとめると次の通りである。

まず、チベットにおいて3種の『八千頌般若』が生み出されるに至った背景として、前伝期における初訳の後、後伝期にHaribhadraの『現観莊嚴光明』がチベットに伝えられ、両者の経文に不一致が認められたことから、その後に両者を一致させるために改訳が重ねられたものと推定した。ただし、3種の成立順序については、ここではそれに2つのパターンが想定されることを指摘するにとどめる。

次に、本稿では近代日本の入蔵者らが将来したチベット語訳『八千頌般若』を紹介した。その中で特に、多田等観が将来した2種の写本のうち、これまでその概要が明らかではなかった花巻市博物館所蔵写本は、現存が確認されている他の諸本に比べてユニークなものであるという点で、またもう一方の東京大学所蔵写本は、チベット語訳『八千頌般若』に関する限り、現存が確認されている中で最古となるロンドン写本、東京写本といったテンパンマ系カンギユルの内容を伝承する写本という点で重要であることを指摘した。

以上のように、梵語原典上において『八千頌般若』が変化変遷を遂げた結果を受け、チベッ

トにおける3種のテキストが生み出されたものと考えられる。本稿で紹介した花巻市博物館所蔵多田将等観来写本などは、このような過程を裏付ける資料といえよう。

略号と文献

一次文献

チベット語訳『八千頌般若』 (*Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa*)

ツェルパ系統

C: Cone, No.1001, vol.77.

P: Peking (大谷大学), No.734, vol. 48 (Rep.: vol. 12).

テンパンマ系統

L: Sher dkar (London), No.647, vol. 101.

S: sTog Palace, No.15, vol.50.

T: Tokyo Tōyō Bunko, No.31, vol.44.

混合系統

D: Derge, Tohoku No.12, vol.33.

H: Lhasa, No.11, vol. 29.

N: sNar thang, No.13, vol.33.

独立系統

Fa: Phug brag, No.838.

Fb: Phug brag, No.839.

Fc: Phug brag, No.840.

単独本

Ht: 花巻市博物館所蔵 (紺紙金泥写本、多田等観将来).

K: 東洋文庫所蔵 (紺紙金泥写本) No.334 (河口慧海将来).

Oa: 大谷大学図書館所蔵 (版本) No.12748 (1/2), Tome 666.

Ob: 大谷大学図書館所蔵 (版本) No.12749(1), Tome 667.

Oc: 大谷大学図書館所蔵 (写本) No.12750 (1/2), Tome668 (能海寛将来).

Od: 大谷大学図書館所蔵 (版本) No.13708, Tome 790 (版本).

Ra: 立正大学図書館所蔵 (版本) No.8 (河口慧海将来). Cf 庄司 [2011b]

= (?) 国立民族学博物館所蔵 (版本) 青木文教将来チベット民族資料目録 No.90.

Tt: 東京大学文学部所蔵 (紺紙金銀泥写本、多田等観将来). ほか

二次文献

- 大谷大學圖書館 [編] [1973] 『大谷大學圖書館所藏西藏文獻目録』 京都：大谷大学図書館。
- 川合 (山口) 務 [1980] 「写本チベット訳『八千頌般若経』の翻訳年代について」『印度學佛教學研究』 29(1), pp.388-386。
- 河口慧海 [2001] 「美術資料 西藏之部」『西藏旅行繪卷；西藏品圖録；美術資料；梵文法華經』 (河口慧海著作集 別卷2)、出雲崎町 (新潟県)：うしお書店、pp.101-234。
- ____ [2004] 『慧海資料』 (河口慧海著作集 別卷3) 出雲崎町 (新潟県)：うしお書店。
- 佼成出版社 [編] [1986] 『東北大学所蔵河口慧海請来チベット資料図録』 東京：佼成出版社。
- 高本康子 [2013] 『ラサ憧憬：青木文教とチベット』 東京：芙蓉書房出版。
- 庄司史生 [2009] 「チベット語訳『八千頌般若波羅蜜多』における系統分類とその基準」『佛教史学研究』 52(1), pp.1-22。
- ____ [2010] 「東洋文庫所蔵・河口慧海将来チベット語訳『八千頌般若経』」『東洋文庫書報』 42, pp.1-18。
- ____ [2011a] 「立正大学図書館所蔵・河口慧海将来チベット語訳『八千頌般若経』」『仏教学論集』 28, pp.(1)-(16)。
- ____ [2011b] 「東洋文庫所蔵・河口慧海将来蔵外写本チベット語訳『金剛般若経』と『法華経』について」『東洋文庫書報』 43, pp.19-42。
- ____ [2014] 「チベットに伝えられる三種の『八千頌般若』について」『印度学仏教学研究』 63(1), pp.(93)-(98)。
- ____ [2015a] 「現存梵本『八千頌般若』はいかに形成されたか」『中央学術研究所紀要』 44, pp.57-78。
- ____ [2015b] 「プダク写本カンギユル所収『八千頌般若』の位置付け」『印度学仏教学研究』 64(1), pp.(93)-(98)。
- ____ [2016a] 「ロンドン写本カンギユル所収『八千頌般若』の位置付け」『三友健容博士古稀記念論文集：智慧のともしび』 山喜房佛書林, pp.(641)322-(661)302。
- ____ [2016b] 「近代日本に将来されたチベット語訳『八千頌般若』について」『宗教研究』 別冊89, pp.281-282。
- ____ [2016c] 『ロンドン写本カンギユル所収チベット語訳『八千頌般若』の研究』 (Bibliotheca Tibetica et Buddhica, vol.1) 山喜房佛書林。
- ____ [2016d] 『八千頌般若経の形成史的研究』 (立正大学大学院文学研究科研究叢書) 山喜房佛書林。
- 隅田正三 [2010] 『求道の師『能海寛』：チベット巡礼探検家』 (改訂版) 新潟：USS 出版。
- 多田明子 & 山口瑞鳳 [編] [2005] 『多田等観：チベット大蔵経にかけた生涯』 東京：春秋社。

- 東京大学文学部印度哲学印度文学研究室 [編] [1965] 『東京大学所蔵チベット文献目録』 東京：東京大学文学部印度哲学印度文学研究室。
- 東洋文庫 [2002] 「河口請来蔵外文献解説」 東京：東洋文庫 東京. (<http://61.197.194.9/Database/KawaguchiTop.html>)
- 中嶋隆藏 [1997] 『出三蔵記集序巻訳注』 平樂寺書店。
- 長野泰彦 [編] [1983] 『国立民族学博物館蔵青木文教師将来チベット民族資料目録』（国立民族学博物館研究報告別冊／国立民族学博物館編，1号）吹田：国立民族学博物館。
- 南条文雄 [1905] 「能海寛君所蔵西藏經典目録写」（①隅田 [2010:72] 所収、②能海 [2009b:523-524] 所収）。
- 能海寛（能海寛研究会 [編]） [2009a] 『フィールド・ノートなどⅠ』（能海寛著作集 第14巻） 東京：USS 出版（うしお書店新社）。
- ____（能海寛研究会 [編]） [2009b] 『フィールド・ノートなどⅡ』（能海寛著作集 第15巻） 東京：USS 出版（うしお書店新社）。
- 羽田野伯猷 [1986] 『チベット・インド学集成』（第1巻 チベット篇1）法蔵館。
- 船山徹 [2013] 『仏典はどう漢訳されたのか：ストラが經典になるとき』 岩波書店。
- 三谷真澄 [2014] 「青木文教と多田等観の請来資料」（龍谷大学龍谷ミュージアム [2014:163-171] 所収）
- 望月海慧 [訳] [2015] 『菩提道灯論：全訳』 起心書房。
- 立正大学大崎図書館 [編] [2013] 『立正大学大崎図書館所蔵河口慧海請来資料解題目録』 東京：立正大学情報メディアセンター。
- 龍谷大学龍谷ミュージアム [編集] [2014] 『チベットの仏教世界：もうひとつの大谷探検隊：特別展』 京都：龍谷大学龍谷ミュージアム。
- Chandra, Lokesh [1974] *The Blue Annals, Śata-piṭaka series, Indo-Asian literatures*, vol. 212, New Delhi: International Academy of Indian Culture.
- Eimer, Helmut [1981] “Zur Anordnung der Abteilungen in der Londoner Handschrift des Tibetischen Kanjur,” *Zentralasiatische Studien*, no.15, pp.537-548.
- Kanakura, Yensho [et al.] [ed.] [1953] *A catalogue of the Tohoku University collection of Tibetan works on Buddhism*, Sendai: Tohoku University.
- Roerich, George N. [1949] *The Blue Annals, Royal Asiatic Society of Bengal monograph series*, vol.7, Calcutta: Royal Asiatic Society of Bengal.
- Torricelli, F. & Dudka, N.N. [1999] ‘Manuscript LTWA No.23476: “sDe can” Sample of the brGyad stong pa.’ *The Tibet Journal (summer)*, 24(2) pp.29-43.

註

(1) この他に「20世紀初頭から半ばにかけて、10人の日本人がチベットに入って」おり、先行研究によって、3つのグループに分けられている(三谷 [2014: 163] より)。

第1グループ……明治時代(ダライラマ13世の時代)

能海寛(1868-1901)……真宗大谷派、ラサ未踏のまま、不明

河口慧海(1866-1945)……黄檗宗(一時還俗)、1900年3月ラサ到達

寺本婉雅(1872-1940)……真宗大谷派、1905年5月ラサ到達

成田安輝(1864-1915)……外務省命(法衣擬装)、1901年12月ラサ到達

第2グループ……大正時代(ダライラマ13世の時代)

矢島保治郎(1882-1963)……冒険旅行(日本力行会)、1911年3月ラサ到達

青木文教(1886-1956)……浄土真宗本願寺派、1913年1月22日ラサ到達

多田等観(1890-1867)……浄土真宗本願寺派、1913年9月30日ラサ到達

(河口慧海)……二度目、1914年8月ラサ到達

第3グループ……太平洋戦争前後(ダライラマ14世の時代)

野本甚蔵(1917-)……陸軍特務機関研修生、1940年1月ラサ到着

木村肥佐生(1922-1989)……興亜義塾塾生、1945年9月ラサ到着

西川一三(1918-2008)……興亜義塾塾生、1945年10月ラサ到着

(2) それらの一覧表は既に他稿にて提示した。再掲すると次の通りである。

【表3 「八千頌般若」諸本における *śreṅika* の訳語】(庄司 [2015b] より)

系統	諸本	分類 I	分類 II		
			①	②	③
テンバンマ系	L	系統 A	<i>gzo sbyangs</i>		
	T	系統 A	<i>gzo sbyangs</i>		
	S	系統 B	<i>phreng ba can</i>		
ツェルバ系	C	系統 B	<i>phreng ba can</i>		
	P	系統 B	<i>phreng ba can</i>		
混合系	D	系統 B	<i>phreng ba can</i>		
	N	系統 B	<i>phreng ba can</i>		
独立系	Fa	系統 B	<i>phreng ba can</i>		
	Fb	系統 B	<i>phreng ba can</i>	<i>'phreng ba can</i>	
	Fc*	系統 A	<i>sde can</i>	<i>gzo sbyangs</i>	<i>bzo sbyangs</i>
単独本	K	系統 A	<i>sde can</i>		
	Ht	系統 B	<i>sde can</i>		
	Tt	系統 A	<i>bzo sbyangs</i>		

* Fc 写本の表紙には *bzo sbyangs* と記され、先行研究でもそのように捉えられているが (Torricelli & Dudka [1999])、その経文を諸本と比較した結果、これは純粋な *bzo sbyangs* ではなく、*sde can* か、または *sde can* と *bzo sbyangs* の中間形態の可能性がある (庄司 [2015])。

(3) ロンドン写本カンギユル目録 (*dKar chag dam chos gsal sgran*) には興味深い記述がある。「般若部」(*sher phyin*) の項目で、「八千頌般若」のことを “*brgyad stong pa*” と記さず、“*bzo byang*” と記している(以下、下線引用者)。

般若部は〔十万頌が〕十六卷、二万〔五千頌〕が四卷と、一万八〔千頌〕が三〔卷〕、一万〔頌〕般若が二〔卷〕と〔八千頌〕(bzo byang)が一〔卷〕。

sher phyin po ti bcu phrag gcig dang drug / nyer khri po ti bzhi dang khri brgyad gsum // sher khri gnyis dang bzo byang gcig / (dKar chag dam chos gsal sgran, no.227a, 3b3-4)

上記引用中、『八千頌般若』のことを *bzo byang* と記すのは、チベット語訳『八千頌般若』に先 *bzo sbyangs*、*sde can*、*'phreng ba can* の3種があることを前提とした上で、ロンドン写本カンギユルには“*bzo byang*” (← *bzo sbyangs*) であるところの『八千頌般若』が収められていることを意味しているのであろう。実際にロンドン写本カンギユルには3種のうち、*bzo sbyangs* の『八千頌般若』が収められている。Helmut Eimer は、1981年の時点で上記記録中の“*bzo byang*”の記述について言及しているが、それが *bzo sbyangs*、*sde can*、*'phreng ba can* の中の *bzo sbyangs* を指すものであるとの見解を示してはいない (Eimer [1981]) ので、ここに指摘しておく (庄司 [2015c])。

- (4) (1) rgya gar gyi mkhan po shākya se na dang dzyā na siddhi dang zhu chen gyi lo tsā ba bande dharma tā shī la la sogs pas bsgyur cing zhus te gtan la phab / (2) slad kyis dbang phyug dam pa'i mnga' bdag bod kyi dpal lha btsan po bkra shis lha lde btsan gyi bkas / rgya gar gyi mkhan po su bhā ṣi ta dang / sgra bsgyur gyi lo tsā ba dge slong rin chen bzang pos 'grel pa dang mthun par bsgyur / (3) slad kyis rgya gar gyi mkhan po paṇḍi ta chen bo dī paṃ ka ra shrī dzyā na dang / zhu chen gyi lo tsā ba dge slong rin chen bzang pos yul dbus kyi 'grel pa la gtugs nas bcos shing zhus te gtan la phab / (4) yang slad kyis skyid smad gnye thang na mo cher / paṇḍi ta chen po dī paṃ ka ra shrī dzyā na dang / lo tsā ba 'brom rgyal ba'i 'byung gnas gnyis kyis brgyad stong pa bshad pa'i dus su cha long zhig gtan la phab / (5) physis ra sgreng gi gtsug lag khang du lo tsā ba 'brom rgyal ba'i 'byung gnas kyis rgya gar gyi mdo gsum la gtugs nas lan gnyis gtan la phab / (6) slad kyis yang lo tsā ba de nyid kyis bshad pa mdzad cing phran tshegs kyang gtan la phab / (7) dus physis lo tsā ba chen po shākya'i dge slong blo ldan shes rab kyis kha che'i dpe dang yul dbus kyi dpe du ma bsags nas gtan la phab / (8) slar yang snyigs dus kyi thams cad mkhyen pa chen po / zha lu lo tsā ba dpal rin chen chos skyong bzang po'i zhal snga nas kyis / rgya bod kyi dpe du ma dang bstun nas shin tu rnam par dag par mdzad pa'i ma phyi las slar yang zhus te gtan la phab ba'o // (D286a2-6; N461b4-462a6; P311b8-312a6)
- (5) (1) dbang phyug dam pa'i mnga' bdag bod kyi lha btsan po khri bkra shis lde btsan gyi bkas / rgya gar gyi mkhan po su bhā ṣi ta dang / sgra bsgyur gyi lo tsā ba chen po dge slong rin chen bzang pos bsgyur nas / (2) slad kyi rgya gar gyi mkhan po paṇḍi ta chen po dī paṃ ka ra shrī dzyā na dang / zhu chen gyi lo tsā ba chen po dge slong rin chen bzang pos yul dbus kyi dpe dang yang gtugs nas bcos shing zhus te gtan la phab pa las / (3) de nas dus physis paṇḍi ta chen po gzhung 'bum phrag gnyis kyis mgrin pa brgyan pa dhi ra pā la zhes bya ba dang / lo tsā ba dge slong blo ldan shes rab kyis legs par bsgyur zhing bcos pa'o // // (D no.3791, 341a5-7; P no.5189, 426a4-7)
- (6) このように経典とその注釈書とをあわせて改訳することは、東アジア文化圏でも行われていたようである。『出三蔵記集』序卷第八所収の僧叡(東晋)による「大品経序第二」には鳩摩羅什(350-409)訳『摩訶般若波羅蜜経』(いわゆる、大品般若経)と『大智度論』の翻訳と改訳の状況を伝え、そこにも両者を対校しながら改訳していたとの記述がみられる(以下、下線引用者)。

…文章はほぼ確定したが、『釈論』(大品経注釈書『大智度論』)に照らして検討してみると、なお不十分なところがあった。かくしてこの論を訳出しながら同時に経の訳を改訂し、『釈論』を訳した時点で(経の)訳文も最終的に定まった。それが確定する以前に、早くも(訳を)筆写して他所に伝える者もいた。さらに恣意的に経文を増補ないし省略して勝手に『般若波羅蜜』と名付ける者もいた。……(船

山 [2013: 69]、また中嶋 [1997: 93] を参照)

…文雖粗定。以釋論檢之猶多不盡。是以隨出其論隨而正之。釋論既訖。爾乃文定。定之未已。已有寫而傳者。又有以意增損。私以般若波羅蜜爲題者。…… (『大正新脩大藏經』第55卷53b11-15)

以上の漢訳『摩訶般若波羅蜜經』と、先のチベット語訳『八千頌般若』における翻訳事情の背景は異なるものではあるが、仏典の翻訳過程を明らかにするために、それぞれ注目されるべき記述である。

(7) 庄司 [2015b] [2016a] では成立順序を *bzo sbyangs* → *sde can* → *'phreng ba can* と理解していたが、現状では、再考を要するものとする。

(8) 将来者別に目録を示すと以下の通りである。略称は筆者による。

A 河口慧海: 『東洋文庫目録』(東洋文庫 [2002])、『東北河口目録』(佼成出版社 [1986])、『立正目録』(立正大学大崎図書館 [2013])。

B 能海寛: 『大谷目録』(大谷大學圖書館 [1973])、『金城目録』(浜田市金城歴史民俗資料館蔵『能海寛請来西藏仏典目録』島根、1989年: 筆者未見)。

C 寺本婉雅: 『大谷目録』(大谷大學圖書館 [1973])。

D 青木文教: 『民博目録』(長野 [1983])、高本 [2013]。

E 多田等観: 『東北目録』(Kanakura [1953])、『東大目録』(東京大学文学部印度哲学印度文学研究室 [1965])、龍谷大学龍谷ミュージアム [2014]。

(9) 庄司 [2016b] にその要旨を示している。

(10) 筆者は本版本と同一完本が大正大学図書館所蔵・金子文庫に収められていることを確認した。完本である大正本の存在により、東洋文庫本が二葉欠けていることがわかる。

(11) 解説によれば、「『能海寛君所蔵西藏經典目録写』第一号から第八号までの經典類で、明治三十二年十一月七日付け、帰国する寺本婉雅に託されたものを南條博士が自宅に預かっていたもので、三十三年一月十三日に原田氏の持ち帰った送り状と確認の上、記念物として能海静子へ譲渡されたものである」というものである(能海 [2009b: 654])。

(12) 解説によれば「……などを甲第巻号から第九号まで、十月二十六日から十一月二十四日までの間に入手したものをサンスクリット語、西藏語で經典の表題、入手日、金銀写本、完欠の状況、枚数、形状、版元が詳細に記録されている」(能海 [2009a: 709])。

(13) 川合 [1980] によれば、*rgya gar gyi mkhan po dharma shi la dang lo tsa ba ban dhe bai ro tsa na ra kshi ta dang / zhang shag kya pra ba la stsogs pas zhus nas gtan la phabs pa //* (II. 200a4-5) (インドの師 Dharma (tā) śīla と翻訳官僧 Vairocanarakṣita とシャン Śākyaprabha 等が校閲して確認したもの) とあるという。このようなコロフォンを持つチベット語訳『八千頌般若』は他に類を見ない。なお、本写本は劣化により、閲覧が不可能な状況である(2008年現在)。

(14) 『大谷目録』の「序」にある「外地に遊学した人たちが持ち帰った資料」の可能性も考えられる。

(15) 青木文教の事績については、龍谷ミュージアム [2014: 180] の「青木文教略年譜」を参照。

(16) 青木請来資料とそれらの所蔵先については、高本 [2013: 252-258]、三谷 [2014: 166-168] に詳しい。

(17) 龍谷ミュージアム [2014: 116] では、次のように解説している。

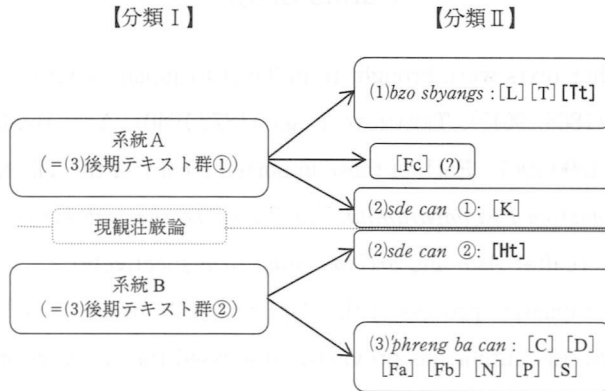
「『八千頌般若經』は、1世紀のインドにおこった大乘仏教運動において、「大乘」(マハーヤーナ) という言葉をはじめ用いた經典。「般若經」は、悟りの彼岸に到るための六波羅蜜の実践徳目のうち、般若波羅蜜、すなわち空性を洞察する無執着・無分別なる「智慧の完成」を根本の菩薩行として宣揚した。全体を、32音節の文字から成る一頌に換算して、「八千頌」と呼んだ。

こうした仏典のチベット語への翻訳は、吐蕃王朝時代の8世紀末から国家事業として行われた。本經は、紺色に染められた厚手の料紙に金泥で書写された特別仕様の装飾經典である。判型も通常より大きく、1葉

8行で、横長の紙の表裏にチベット文字で経文が記される。様式はインドの貝葉写本を踏襲したものである。また経文中の否定辞 *myi* の文字表記は、9世紀以前の古写本に遡る形を伝える。多田の将来資料の一つ。[能仁]

- (18) 先行研究によれば、*sde can* は3種のうち最も古い伝承であると指摘している (Torricelli & Dudka [1999]) が、本写本は【分類Ⅰ】では系統Bである。この点により、*sde can* を最古とする見解は否定される。
- (19) 『八千頌般若』に関する限り、「東京写本」と最も近似するカンギユルは、「ロンドン写本 (略号L)」であるが、両者はともにテンパンマ系統のカンギユルである。
- (20) 再掲すると次の通りである。

〔図4 チベット語訳『八千頌般若』諸本の位置付け〕 (庄司 [2014] より)



- (21) パタン写本 (2種) とタゴ写本 (49種) はここでは扱っていない (庄司 [2016c] を参照)

(平成28年度立正大学研究推進・地域連携センター支援費 「第3種：チベットにおける仏典翻訳語の変遷に関する研究」による研究成果の一部)

〈キーワード〉 大乘経典、般若経、『八千頌般若』、カンギユル、河口慧海、能海寛、寺本婉雅、青木文教、多田等観、経典形成史、経典翻訳史

Summary

On Retranslation Process of the Tibetan Version of the *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā* and its Background

Fumio SHŌJI

Buddhist and other texts were brought from Tibet to Japan by KAWAGUCHI Ekai (1866-1945), NŌMI Kan (1868-1901?), TERAMOTO Enga (1872-1940), AOKI Bunkyō (1886-1956), and TADA Tōkan (1890-1967). Each of these imported a copy of the Tibetan translation of the (Ārya-) *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*, Tib. *'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa* (hereafter *Aṣṭa* and *brGyad stong pa* respectively).

Regarding the compilation process of the *Aṣṭa*, primarily using the Tibetan translation the *brGyad stong pa*, the author has previously discussed the two versions of the *Aṣṭa* in India and the three versions of the *brGyad stong pa* in Tibet. I pointed out that among them there are extant examples of the same sūtra copied separately (many of them are decorated texts with dark blue paper and using gold and silver lettering) as an independent edition not included in the Kanjur, and that among them there are Tibetan texts older than the extant Sanskrit text of the *Aṣṭa* from Nepal.

In other words, it was found that even though the date of copying of a decorated text was relatively recent, the content of some manuscripts preserved an older textual lineage not included in the Tshal pa group. These texts are significant for an understanding of the compilation process of the *Aṣṭa*.

In this paper I examine two kinds of manuscripts of Tibetan translations of the *Aṣṭa* imported to Japan by modern Japanese Buddhists, identifying the position of their manuscripts among the extant *brGyad stong pa* texts included in the Kanjur, and furthermore clarify the background of the development of three versions of the *brGyad stong pa* in Tibet.